

# 物語生成論による自閉スペクトラム症の支援 —「見立て」から「たとえ話」へ— Supporting Autism Spectrum Disorders with Narratology —From “metaphors” to “parables”—

青木慎一郎<sup>†</sup>  
Shin-ichiro Aoki

<sup>†</sup>岩手県立大学  
Iwate Prefectural University  
midorigi@iwate-pu.ac.jp

## 要旨

ASD 者の情報選択特性をナラトロジーの観点から検討した。ASD 者はコミュニケーションにおいて物語の論理展開の分岐・選択には注目しない。分岐・選択の少ない要約に親和性がある。「見立て」「たとえ話」は構造が異なる要約である。「見立て」は結論に至らず想起継続となり支障が出る。「たとえ話」は論理展開があり他者と共有が可能で想起継続を止め得る。また、現実と離れた表現であり、状況と距離を置けるので支援に活用できる。物語生成論によるシステム化が期待される。

キーワード：ASD の想起継続、ナラトロジー、論理展開の分岐・選択、見立て、たとえ話、物語生成論

## はじめに

自閉スペクトラム症（以下 ASD）者やその認知行動傾向のある成人の物語生成論を活用した支援を行ってきた（青木 2017, 2018a, 2018b, 2019, 2020）。なお、ASD という診断名はスペクトラムであり、定型者（定型発達者）との線引きが明確ではない。診断は相対的なものであるため、それを受けていないが支援が必要な方も対象とする。

ASD 者の認知行動傾向について、その情報選択に特性があることは既に取り上げられている。しかし、それがどのような特性なのかについては、「・・・ができない」という否定形によってしか語られていない。本論では、ASD 者が「どのように情報選択をしているのか」を「想起の継続」を対象として検討した。「想起の継続」は後述のように「タイムスリップ現象」に近いものと思われる。成人の場合は、否定的な感情によるストレスがあるという問題だけではない。否定的な感情がない例でも学習や仕事を停滞させてしまうことが多くみられる。

ここでは、コミュニケーションにおける物語の論理展開における分岐と、そこでの情報の選択について検討した。ASD 者は、分岐・選択の場面には注目しないことがある。また、ASD 者は分岐・選択が無い・少ない「見

立て」「たとえ話」に親和性を有する。この二点を取り上げた。この二つともが ASD 者にとっては自然な（無意識の）ことである。

本論では物語の内容や解釈の多様性ではなく、形式や構造といういわば設計図の分析を対象とする（橋本, 2014, p21）。支援としての「たとえ話」は異なる解釈の提案ではない。「見立て」とは構造が異なるのである。

## 1. 自閉スペクトラム症者の「見立て」と「たとえ話」

ASD 者の中には要約した表現の「見立て」や「たとえ話」が会話に出てくる方がおられる。また、それ以上に他者の要約表現に影響を受けることが多い。ずいぶん前の話だが、こんな経験がある。ある学生が先生から引用元の不記載を「それでは小保方さんだぞ」と叱責されたという。怒った表情で、大きな声だったらしい。学生はこの言葉について思い出し続け、どうい場合に引用が許させるのかも考え続けていた。この場面についての、先生はあなたを叱咤激励していたのかもしれない、多少の時節柄の冗談も入っていたかもしれないという可能性は、異なる解釈の提案にすぎず、受け入れてもらえなかった。後述の良い「たとえ話」の提案ができていればと思う。ASD 者はこれが他の選択をも考えるべき分岐の場面としては注目しないようである。

このような選択の可能性を考える場面が、物語の論理展開の分岐・選択が関係する「驚き（ギャップ）」の状況である。これに定型者は分岐・選択として自然に反応することが多い。また、後述の「見立て」も「たとえ話」も論理展開の分岐・選択が無い・少ないことから ASD 者は自然に親和性を持つ。

これから述べる「見立て」「たとえ話」に近い概念として、アナロジーとメタファーがある（嶋, 2020）。香によれば「(アナロジーとメタファーという) 二つの概

念の定義は論者によって異なる」ようであり、ここでは臨床的な観点から、「見立て」「たとえ話」の二つで表現した（香, 2020）。「見立て」は辞書的には、あるものをそれと似た別のものでも示すことであり、「富士山に見立てた富士塚」というような縮減した要約的なものである。また、後述するが「俳諧であるものを他になぞらえて句をつくること」という使われ方もする。一方の「たとえ話」は辞書的には、ある事柄を理解できるようにするために、他の事柄に置き換えて説明するものとされる。本論では、「見立て」と「たとえ話」は両者とも「喩え」といえる要約的な情報選択であり、上述の論理展開の分岐・選択が少ない点に着目した。ASD者は要約的な情報選択に自然な親和性が高い。そのうち、論理展開（因果関係、起承転結）の無いものを「見立て」、それがあるのが「たとえ話」とした。また、「見立て」は感覚にもとづくことが多い。

「たとえ話」の典型的なものは「昔話」や「民話」だろう。これらは比較的少ない論理展開で結論に至る。また、登場人物は現実感に乏しく、擬人化された動物という場合さえあるため距離をおいて見ることができる。小方は物語生成システムに取り込む対象の一つにあげている（小方, 2019）。小野他が物語生成論としてのシステム化としても取り上げており、その意味でも後述のように理解や支援の手段としての可能性がある（小野他, 2019①②）。

ASD者の「見立て」と「たとえ話」の例を表に示した。「見立て」の中には「喩え」ではなくそのままに近いものもあるが、その場合はきっかけとなった発言者の表情、口調、音としての強さ等が影響していると思われる。

表1 「見立て」の例

1	君は「言葉のキャッチボールができない」と言われ思い出し考え続ける
2	毎年、暑くなると体調を崩すのを上司から「小学生の夏休み」と言われたのを考え続ける
3	ミスに対して「二度目は無い」と言われて、この言葉と自分のミスを思い出し続ける
4	適任ではないと思い異動を希望したら「あなたとかみ合うところはない」と言われ気にする
5	上司の自分へのぶっきらぼうな口調に不快感を持ち続ける。口の上手い同僚には優しい口調
6	上がらない職階名を「能力が低いことの喩えだ」と「職階名」について考え続ける

表1の「見立て」はこれをきっかけに否定的な想起が継続した例である。そうではない、否定的ではなく肯定的な想起が続くこともあり、また影響の少ない「見立て」も多い。そして、「見立て」には、やや的外れなものもある。例えば、病院で投与された眠気の強い薬を、本人には病院を非難する意図は全くないのだが「麻薬」と表現する。あるいは、職場で孤立している状況を「陸の孤島」と表現するなどである。

表2の「たとえ話」は、表1「見立て」に番号が対応しており、想起の継続が終わるために有効だった例である。「見立て」には有効な「たとえ話」が出てくるとは限らない。また、そういう役割のない「たとえ話」も多い。

表2 「たとえ話」の例

1	「キャッチボールを続けていけばウニでも棘がとれてくる」という言葉で楽になる
2	「若葉マークなんです」と上司に話したところ不快感が薄らいだという
3	「自分で自分を苛めているんだね」という言葉に救われたという
4	ゲームを引用した「魔法使いなのに武力で戦わなければならない職場」で楽になった
5	「ジャイアンとのび太とスネ夫みたいだ」と話され楽になったという
6	「自分が自分の毒親だ」の言葉で自分の能力を否定する気持ちが和らいだという

ところで、定型者も特定状況では、この「見立て」を行っている。その例として「見立て」という言葉が、実はそれから参照した俳句がある。俳句については、例えば「夏草や兵どもが夢の跡」の「夏草」のような感覚的な要約をきっかけとして想起（新田の「語りかけ」による「読者の想像力」）を継続してもよいのである。新田によれば、「俳句の語る物語は、必然的に読者の想像力による補完に依存することとなる」「俳句はその成り立ちからして、完結性の欠如した不完全な語りである」「継続する開かれた語りかけがある」。後述の「驚き（ギャップ）」も俳句による（新田, 2019）。

ところが、俳句の場合には、このように想起を続けてもよい状況であることを示す合図がある。つまり、「5、7、5」という形態、「や」「かな」というような「切れ字」等の想起を延々と続けてよいという約束事の合図が存在する。ASD者では、「見立て」のきっかけは存在する

のだが、それが定型者とは異なり、他者と共有可能な合図がない。定型者における俳句の場合の「夏草」のような「見立て」をしてしまうため、「たとえ話」のように論理展開により終わることができず想起が継続する。物語が終わるには結論が他者と共有される必要があるからである。

これは三者関係以上の会話で起こりやすい。ちなみに、二者関係の会話も苦手な ASD 者が多いが、二者関係であればその都度相手に確認することができるという利点を述べる ASD 者がおられる。これは、コミュニケーションにおける論理展開の分岐にあたって情報を選択するヒントを得るとのことだろう。

ところで、上述の継続する想起には不安や罪悪感などのマイナス感情を伴う場合がある。このような想起の継続はこれまでも、「タイムスリップ現象」として取り上げられてきた。杉山は、タイムスリップ現象について、「自閉症スペクトラム障害の児童、成人が遙か昔のことを突然に想起し、あたかもつい先ほどのことのように扱う」ことで「(ストレス障害の)フラッシュバックと同様、想起というより再体験である」と述べている。定型者でもこれに類することはあるが、成人の ASD 者では、上述のように想起にはなんらかの契機場面が存在する場合もあった。それは、後述のように感覚特性に関係した言葉、及びそれが既存の要約的認識の否定になっているという驚きがある。既存の要約的認識の書き換えを要求されていることは感じるため、想起はすぐに終わることはできずに続いてしまう。そのため学習や仕事に支障をきたす。「想起の継続」とはこのような現象である。この想起では、不安や罪悪感のような感情を単に過去の事として思い起こすのではなく、眼前の事のように再体験し続け現時点に影響を及ぼす。定型者にも抑うつ気分の反芻思考と呼ばれるものがある。それとの違いは ASD 者の場合は、幼小児期より継続した傾向で一時的ではないこと、苦痛の程度に比較して社会生活への支障の程度が高いことが挙げられる。想起の継続にはマイナスの感情を伴わない場合もあり、「なぜかそうなるんです」「本能みたいなんです」と笑いながら話されたこともある。

## 2. 手記による「見立て」の検討

①綾屋(2008)の手記より

詳細については公表された ASD 者の手記を参照する。ASD の診断を受けている綾屋(2008)は、「当事者研究」として自身の心理内面を詳しく記述している。例え

ば、車いすを使う友人が引っ越し際に、一緒に不動産屋に行った場面がある。これは、ASD 者が困難を感じる三者関係である。三者以上の関係は選択すべき情報量が多い。引っ越し先を求めたところ、不動産屋の「妙に優しい感じ」「焦っている表情」「曖昧な返事」等の表情や動作という感覚を伴う言葉、及びそれが後述の既存の要約的認識の否定になっているという驚き(意外性、ギャップ)となる。定型者にとっては、コミュニケーションにおける論理展開の分岐・選択の場面である。これを契機として友人に対する「差別的な視線」という要約をする。これも正しいのだが他者との共有を求めれば後述のようは他の要約も選択肢となるだろう。ASD 者には視覚情報優位の方もおられることから「差別的な視線」のような要約を「見立て」とよぶこととする(以下、図1参照)。想起の継続が始まったのは、綾屋の当該の友人に対する自身の「私の障害体験を繊細にわかってくれる恩人」という論理展開を有する既存の要約的認識と矛盾したからである(綾屋, 2008, pp. 115-116)。

上述のように、ASD 者による「見立て」は、そのきっかけに感覚の感性が関与していると思われる。また、論理展開による結論に至らず、俳句のようにそれが始まるきっかけに約束事もないため他者との共有ができない。さらに、当該の友人に対する自身の要約的認識と矛盾して不安になる。書き換えを要求されていることは感じるため、「見立て」との間で混乱し「私の従来のキャラが分からなくなる」という不安な想起の継続が始まってしまう(綾屋, 熊谷 2008, p. 109)。

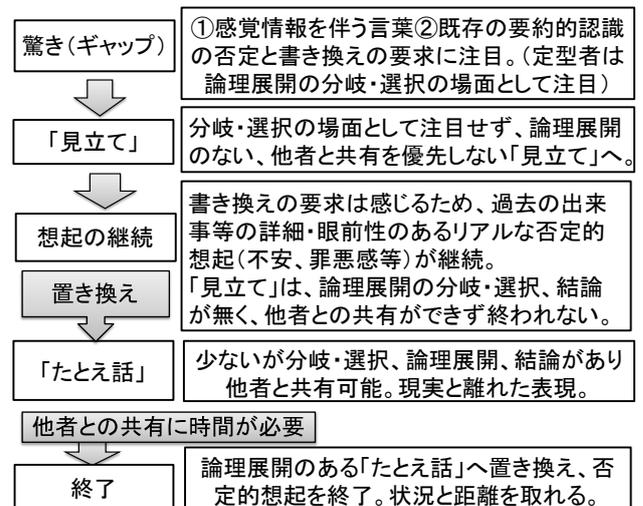


図1 ASD 者の「見立て」「たとえ話」「置き換え」

これを自身で「不安に結びつくまとめあげ方をしていいる」と表現している（綾屋, 熊谷, 2008, p. 90）。ここで強調しておきたいのは、「差別的な視線」という「見立て」には論理展開による「結論」が無いということだけでなく、他者との共有ができないために既存の要約的認識の書き換えが要求されていると感じてしまう点である。そのため、「差別的な視線」という「見立て」の後には想起が続くのである。

綾屋が述べる「シュトコー」がこの「想起の継続」をよく示している。『私ってダメな人間だ』『価値がない』という思考回路が始まる。ここにたどり着くと、あとは延々とその回路がとまらず、出口なく、ぐるぐると回りつづけることになる。この終わりのないぐるぐると走らされる回路のことを、<シュトコー（首都高）>だと喩えている（綾屋, 熊谷 2008, p98）。この時点で「シュトコー」は「苦悩と絶望」とされており状況と距離を置けてはいない。しかし、「否定的な考えが続くのはシュトコーだ」という論理展開があり、現実と離れた表現でもあり、後述の「たとえ話」の構造・設計図は満たしている（綾屋, 熊谷 2008, p100）。「たとえ話」にも必要なもう一つの要素については後述する。

#### ②ドナ・ウィリアムズ(1994)の手記より

ドナ・ウィリアムズの手記にも「見立て」による「想起の継続」の典型的な例が表されている（Williams, D., 1994, p74）。ドナの弟トムの「笑いなよ、ハッピーになりな（笑えば幸せになれる）」という言葉は、「ニッと笑いかけながら」という感覚情報を伴っていた。「口元は笑いながら、瞳は笑ってない」「『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫が「見立て」となっている。そして、「かっとう頭が熱く」なり次のような想起が継続する。「たとえ嫌悪でいっぱいになっていようと、笑顔でいろと教えられ続けた」という幼小児期の辛い体験を想起し続ける。そして、「笑顔でいろ」と「言われた通りにする陰で自分たちのしていることを正当化した」大人たちのことを思い出す。ドナが幼小児期に「想像を絶するほどの体験」をしていることが記されている（Williams, D., 1992, p286）。そして、「昔の記憶がとめどなくよみがえってきて、私は怒りに震えた」となる。さらに、パニックから過換気を起こしてしまう。これはトムの発言が自身の「笑っていても幸せではなかった」という既存の要約的認識を否定するものだったからである。ドナ・ウィリアムズにとっては、トムも同じ幼小児期の体験から「笑顔でいろ」に対する嫌悪を共有しているはずだという既存の認識を否定されたこと

も予想される。既存の要約的認識の書き換えを要求されていることは感じているのである。

「想起の継続」には過去の出来事もおそらく出現しており、不安や罪悪感などのマイナス感情を伴う場合が多い。このような「想起の継続」が上述の「タイムスリップ現象」の一つの表れと思われる。他にも、ドナ・ウィリアムズが授業中二人一組になるように指示されたが、取り残された状況を「まるで一人だけ伝染病にかかっているかのよう」と述べているのも「見立て」だろう（Williams, D., 1994, p99）。

### 3. 「たとえ話」の ASD 者支援可能性

#### ①綾屋紗月の手記より

綾屋の手記は続く。時間がたった後で、綾屋（2008, p118）は「間違っているのは差別的まなざしだ」と要約する。これは、「間違っている」という結論のある要約であり、それゆえ他者との共有がある程度は可能である。「差別的な視線」との違いは論理展開があり結論に至るところである。この共有可能な要約によって「差別的な視線」から始まった不安をとまらぬ想起の継続を止めることができた。

「見立て」を止めることができれば、実際には後から出てきた「間違っているのは差別的まなざしだ」という要約がこの場面で直ぐに可能だったかもしれない。そして、この要約は、「車いすを使う友人」との間ばかりでなく、おそらく不動産屋も分かっている少しは共有できる要約だろう。つまり、綾屋の「差別的まなざし」は論理展開がない「見立て」であったが、「間違っているのは差別的まなざしだ」となって他者にも共有可能性のある要約、つまり結論のある論理展開となったのである。これは、時間がたってから、自身で置き換えたものである。しかし、想起の継続を止めることができたとしても、否定的な感情から距離をとれているとはいえないので、「概説」とした。これと区別した後述の「たとえ話」は現実の対象から離れた表現である（表3）。

もっと早い段階で、状況から距離をとれるような幅広く他者との共有可能な要約を作るための支援ができないだろうか。「差別的な視線」という当初の「見立て」は一つの事実と思われるが、定型者はこの情報だけを選択するとは限らないだろう。この場面では、たとえば不動産屋にも多少はある「謝罪」の気持ちや、「商売上の損得を重視した」という情報もあり得る（青木, 2021）。そして、これらの情報を取り上げれば他の分岐・選択も可能となるかもしれない。

それが「たとえ話」なのだが、後述のように困難が伴う。「見立て」を「たとえ話」に置き換えるためには、相互のコミュニケーションによって発見するということが求められる。上記の表2の「たとえ話」は偶然の産物でもある。そのような前提のもとに控えめにこの不動産屋の「たとえ話」を提案してみよう。この人は、おそらく差別を強く主張することはしないだろう。そして、周りと対立したくない、責任を取りたくない、逃げ道を用意しようとする「志の低い官僚みたいな人だ」ではどうだろうか(表4)。

表3 見立て、概説、たとえ話

見立て	概説	たとえ話
並列的情報の想起が論理展開・結論無し の状況で継続する	論理展開が有り想起は終了するが現実に即した表現のため、距離を取れない	論理展開が有り終了し、現実と離れた表現で、距離を置いて見ることができる

表4 可能性としての「たとえ話」の例①

見立て	概説	たとえ話
差別的な視線	差別的まなざしが間違っている	志の低い官僚みたいな人だ?

上述のように、綾屋(2008)は「シュトコー」という喩えをしている。「シュトコー」は、否定的な感情が「延々と出口なく、ぐるぐると回りつづける」ことで、それを「首都高」に喩えている。綾屋は「シュトコー」の他にも「夢侵入」「ヒトリ反省会」「ヒトリタイワ」「したい性」「エイエンモード」等の多くの喩えを記述している(綾屋,熊谷2008)。

「シュトコー」については、後日この手記に関する座談会の中で、この手記を「読んでくれた友達が『今日は家に帰ったらシュトコーだね』とか、ちょっと冗談まじりに言ってくれることがあったりして、そういうことがあると、しんどさに違いはないのだけど、自分自身のしんどさに没入するだけじゃなく、ちょっと俯瞰で見られるポジションもできたかな、という感じがあります」と述べている(綾屋他,2019p40)。これは「シュトコー」のような「たとえ話」が現実と離れた表現であることや論理展開があるというだけでなく、それが他者と共有できることが重要であることを示している。「確認作業を、2人でいねいにやってきました」というよ

うに、「シュトコー」は熊谷と2人の共作と思われる(綾屋他,2019p38)。その意味でも、本論の支援のための「たとえ話」の例と言わせてもらえればありがたい。共有できる場の重要性はこの座談会でも指摘されている。「たとえ話」が「話」になるためには他者との共有が条件なのである。また、後述のように支援が有効となるには他者との共有の確認のための時間が必要だということをも示しているのではないだろうか。

## ②ドナ・ウィリアムズの手記より

上述のドナ・ウィリアムズの手記でも、「笑いなよ、ハッピーになりな」(笑えば幸せになれる)という言葉が「ニッと笑いかけながら」という感情情報等を伴いチェシャ猫という「見立て」となっていた。これから始まる「想起の継続」は、弟のトムの本当は、全部、覚えているよ(笑っていても幸せでなかった)という「概説」で、トムも同じく経験した幼小児期の辛い体験を認めさせる論理展開となり終わっている。その時、トムは「冷淡で、それでいて傷つきやすそうな表情」であった(Williams, D., 1994, p77)。ドナ・ウィリアムズ本人の自分の弟に対する発言への後悔も伝わってくる。この場合も、想起の継続は終わっているが、否定的な感情から距離をとれているとは言えないだろう。この状況に対しての「たとえ話」の可能性はあるだろうか。正解だとはもちろん言えないが、あえて「たとえ話」を提案してみる。「笑いなよ、ハッピーになりな」は結果である笑いを幸せになることの原因にしようとしている。「交番が増える地域に犯罪が増える(逆の因果関係)みたいだ」という「たとえ話」を考えてみた(表5)。

表5 可能性としての「たとえ話」の例②

見立て	概説	たとえ話
笑いなよ、ハッピーになりな(笑えば幸せになれる)+チェシャ猫	本当は、全部、覚えているよ(笑っていても幸せではなかった)	交番が増える地域に犯罪が増える(逆の因果関係)みたいだ?

また、ドナ・ウィリアムズは辛い対人関係に適応するために、幼いころからキャロルとウィリーという分身を想定し、一定の行動様式をとることによって乗り越えようとしている(Williams, D., 1994, p14)。幼小児期の強い葛藤状況とはいえこれが解離性同一性障害とは考えにくい。これらも要約、「見立て」としての「役」と考えられる。その後「かつてのキャロルは、ついに、

現実を生きている本物のドナ・ウィリアムズの一部になった」という「たとえ話」により距離をとる論理展開となっている (Williams, D., 1994, p151)。

因みに、私が知っている方の中には地域の劇団や大学のサークル劇団に所属している方たちが少なくとも3人はおられる。彼らは一様に「人とのコミュニケーションは苦手だが台詞がきまっている役を人前でやることは好きだ。アドリブはできないが・・・」と話す。また、二次創作であれば小説や漫画を書いている方も知っている。これらは、いずれも論理展開における複数の情報からの分岐・選択を要求されることが少ないため自然な親和性があるものと思われる。

ドナ・ウィリアムズの場合、このような他者との共有可能な要約として、しかも否定的感情から距離をおける「たとえ話」が、少なくともこの手記を書く段階においては多く見られる。「以前、わたしは、『世の中』とは、一人一人に服を作って着せる職人のようなものだと思っていました。そうして、たまにぴったりとは合わない服ができてしまっても、それを着せられてしまう人も出てくる」(Williams, D., 1994, p92)。同じクラスの女性から「皆とは違っているんじゃない？」と聞かれて「わたしは、これから発生する場所を捜しているひとつの文化だ」と答えたというのもその例だろう (Williams, D., 1994, p97)。

#### 4. ナラトロジーからみた ASD 者の情報選択の特性と物語生成論による支援

##### ①物語の論理展開における分岐・選択

本論ではコミュニケーションにおける物語を検討する。橋本はナラトロジーの観点から「物語の時間」について、「論理的にありうる選択肢のうちの一つが実現すること」が時間であり、また「登場人物は次の行動の選択をせまられる」とブレモンを引用して述べている。また、バルトがこの物語における「分岐」を「物語の危機」と呼んでいることも紹介している (橋本, 2014, p38-39)。

バルトは「物語空間を埋める補足的な性質」のある物語の構成要素を「触媒」としている。おそらく「見立て」もこの一部だろう。この「触媒」に「枢軸機能体」を対比させて、「枢軸機能体」は「因果的な二者択一を開始する」ものとしている (Bartes, R1961)。物語における「因果的な二者択一を開始する」という「枢軸機能体」の分岐・選択は、ナラトロジーによる物語の形式や構造の観点によるものである。こうして、本論ではコミュニケーションにおける物語の形式・構造である「物語の論

理展開における分岐・選択」を取り上げた。

##### ②ASD 者のコミュニケーションにおける物語

ASD 者のコミュニケーションにおける情報選択に特徴があることは指摘されてきたことである。しかし、ASD 者は、コミュニケーションにおいて物語を作ることができないわけではない。コミュニケーションの困難を物語が作れないことと同一視するべきではない。つまり、彼らのコミュニケーションの内容は物語としての論理展開あるいは因果関係として理解できる。

精神医学の観点からは、コミュニケーションの論理展開 (因果関係) は発生的了解という概念で検討する。この観点では、ASD 者のコミュニケーションは発生的了解可能であり正常となるので、情報選択の特徴を示すことはできない。しかし、状況にそぐわない場合があるのはなぜだろうか。それを、上述のように情報の選択肢を多数保持しなければならない分岐・選択の課題と考えれば設計図レベルでの相違という理解ができるし対策も考えられるのである。

##### ③ASD 者の物語における分岐・選択

本論では、ASD 者の学習や仕事の妨げとなっている「想起の継続」について検討した。前述のように ASD 者は、感覚特性を背景とした言葉と既存の結論のある要約的認識を否定されたことが「驚き (ギャップ)」となる。ASD 者は上記の二つの情報そのものに注意が向いて「見立て」に注目してしまう。その状況が分岐・選択の場面であることには注目しない。その理由は、敏感性も関与していると思われるが、コミュニケーションにおける物語の論理展開において、分岐・選択をする場面では多くの選択肢、つまりその場限りの多くの情報を保持して対応することが必要となることも関係するだろう。このような情報保持の特徴は、おそらくワーキングメモリーが長期記憶に比較して相対的に低いためと思われる。したがって、一方で分岐・選択が終了した、その場限りではない情報を多数保持することは得意だという側面もあり、それが「想起の継続」の継続量にも関係すると考えられる。

ASD 者では、このように「驚き (ギャップ)」が契機となり「見立て」から過去の出来事も含めた詳細で眼前性のある不安・罪悪感等の「想起の継続」が始まる。ただし、想起の継続は否定的なものばかりではない。先に進まないことでは同じように困るのだが「アイデアが次々に出てきて夢中になってしまう」という場合もある。このように想起が継続してしまうのは、分岐において自然に「見立て」を選択し、論理展開を他者と共有で

きない方向に進むからである。

#### ④「たとえ話」への置き換えによる支援

上述のように想起の継続は、「見立て」の「たとえ話」への置き換えによって止めることができる(図1)。それは、「たとえ話」は論理展開が他者と共有可能な要約であるため想起を終えることができるからである。さらに、「たとえ話」は現実と離れた表現であり、詳細・眼前性がなく状況との距離を置くという効果もある。実際に、ASD者は時間を要するのだが「たとえ話」によって不安の想起継続を抑えられる場合があった(表2, 手記を参照)。重要な点は、「たとえ話」が「見立て」とは構造が異なるものであり、異なる解釈の提案ではないという点である。

もちろん、この「たとえ話」を視野に入れた支援というのはASD者に限ったことではない。定型者にも有効であり、「童話療法」という心理療法さえもある(蘭, 2008)。定型者の場合も、「童話」が自分の状況から距離を置くことの利点を活用していると思われる。ASDという診断がスペクトラムであり、定型者との線が引けるわけではないことから考えれば当然だろう。ASD者の場合は上述のように「たとえ話」が論理展開の分岐・選択を要求することが少ないことから親和性があり比較的有効性が高いという程度の差だろう。

#### ⑤支援における物語生成論によるシステム化

とはいえ、実際には上述の手記にあるように「たとえ話」ではなく、「概説」となってしまう場合も多い。「見立て」との置き換えが可能な、いわばフィットする「たとえ話」は個性が強く支援者が探そうとしても難しいことが多い。効力を発揮するには他者との共有の確認のため時間を要するというのも多い。このように、支援者の案が良いとは限らないので、ASD者が探すのを補助するという関与のしかたが有効と思われる。そして、支援する側は多くの「たとえ話」を用意しておく必要がある。この点からも支援においては物語生成論によるシステム化が期待できる。まず、「見立て」のきっかけとなる「驚き(ギャップ)」のシステム化が検討されている。(小野・小方, 2021)。論理展開の分岐・選択において複数の選択肢情報を提供し補助するシステムも可能かもしれない。しかし、より有効なのは、例えば昔話を参照した「たとえ話」を用意して提案するというシステムだろう。そして、システム化はこの議論自体の検証にもなるだろう。

## おわりに

ASD者の情報選択の特性をコミュニケーションにおける物語の構造である論理展開の分岐・選択から検討した。以下に要約する(図1)。

ASD者は、①感覚情報を伴う言葉があり、②既存の要約的認識が否定され書き換えを要求されていると感じる「驚き(ギャップ)」の場面では、おそらく感性が関与してこの二つの情報そのものに自然に注意が向き「見立て」の契機となる。つまり、ASD者は論理展開における分岐・選択の場面としては注目しないのである。この場面で定型者は分岐・選択の場面として注目する。

「見立て」は論理展開による分岐・選択、結論がないため他者と共有を優先しないものである。しかし、ASD者も書き換えを要求されていることは感じる。そこで、共有による結論に至らないため、過去の出来事の詳細・眼前性のある否定的な想起が継続することになる。これは、少ないが結論のある他者との共有可能な要約である「概説」「たとえ話」への置き換えで終わることができる。

ASD者は分岐・選択が少ない「概説」「たとえ話」にも自然に親和性がある。このうち、「たとえ話」は「概説」とは異なり現実と離れた表現で状況との距離を置く作用があり、状況を客観視できる(表3)。他者との共有には時間が必要だが、この論理展開のある「たとえ話」への置き換えで否定的な想起を終了することができる。このような、状況と距離を取れることを意識した支援が有効である。

この際に作り出す「たとえ話」は、「見立て」とは構造・設計図が異なるものであり、異なる解釈の提案ではないという点が重要である。この支援において、物語生成論による論理展開の分岐・選択における複数の情報提供をすること、あるいは例えば昔話を参照した「たとえ話」の提案のシステム化の可能性もある。そのシステム化はこの議論の検証ともなるだろう。

## 文献

- [1] 青木慎一郎(2017)学習困難とストーリー生成. 日本認知科学会第34回大会発表論文集. OS18-81.
- [2] 青木慎一郎(2018a)職場での自閉スペクトラム症に関する医師・他職種連携—「心理社会的動機」と「般化」の視点から— 第25回日本産業精神保健学会 発表抄録集
- [3] 青木慎一郎, 小方 孝, 小野淳平(2018b)ASDに見られる認知パターンと物語生成-「驚き」に注目して- 日本認知科学会第35回大会発表論文集 sP1-49
- [4] 青木慎一郎(2019)物語生成における「見える要素」から「見えない要素」への転換を促すメカニズム『日本認知科学会第36回大会発表論文集』. OS03-1.

- [5] 青木 慎一郎、小方 孝、小野 淳平(2020)物語生成論による自閉スペクトラム症の理解 2020 年度日本認知科学会第 37 回大会 P-135 日本認知科学会第 37 回大会発表論文集 pp842-849
- [6] 青木慎一郎(2021)物語受容における「ストーリー」と「背景」への注目 ―物語生成論による自閉症スペクトラム症の理解―小方孝編著 ポストナラトロジーの諸相 pp245-266 新曜社
- [7] 蘭香代子(2008)童話療法：「物語」と「描画」による表現療法 誠信書房
- [8] 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008). 『発達障害当事者研究——ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院.
- [9] 綾屋紗月・熊谷晋一郎・川本英夫 (2009) Cross Talk 当事者研究 『ゆっくりていねいにつながりたい』を読む 看護学雑誌 73 卷 3 号 pp34-49
- [10] Bartes,R (1961) Introduction A L'analyse Structurale Des Recits 花輪光沢(1979) 物語の構造分析序説 p17 みすず書房
- [11] 橋本陽介(2014) ナラトロジー入門 プロップからジュネットまでの物語論 水声社
- [12] 新田義彦 (2019) 俳句における美意識について. 『日本認知科学会第 36 回大会発表論文集』, OS03-2, 433-435.
- [13] 小方孝 (2018) 物語と人間／社会／機械. 小方孝・川村洋次・金井明人『情報物語論——人工知能・認知・社会過程と物語生成』(pp.19-44), 白桃書房
- [14] 小方 孝(2019) 日本の物語論・文学理論の物語生成システムへの取り込みに向けて 2019 年度日本認知科学会第 36 回大会発表論文集 p446
- [15] 小野淳平・伊藤拓哉・小方孝 (2019①) 昔話のモチーフのプログラム化とモチーフ構造の比較. 『人工知能学会第 2 種研究会ことば工学研究会資料』. 61, 51-62.
- [16] 小野淳平・小方孝・伊藤拓哉 (2019②) 昔話のモチーフを物語生成へ利用するための基礎研究. 『2019 年度人工知能学会全国大会 (第 33 回) 論文集』. 1F2-NFC-1-05.
- [17] 小野淳平・小方孝(2021) 物語自動生成ゲームにおける驚きと物語―驚きに基づくストーリー生成のためのギャップ技法― 小方孝編著 ポストナラトロジーの諸相 Pp99-130 新曜社
- [18] 杉山登志郎 自閉症の精神病理 The Japanese Journal of Autistic Spectrum 2016, Vol.13-2, p8
- [19] 嶋大樹 関係フレーム理論からみたメタファー 心理臨床科学 Doshisha Clinical Psychology: Therapy and Research 2020, Vol. 10, No. 1, Pp. 39-52
- [20] Williams, D. (1992). Nobody Nowhere. Times Book: Times Book. (河野万里子 (訳)(1993). 『自閉症だったわたしへ』新潮社.
- [21] Williams, D. (1994). @Somebody Somewhere: Breaking free from the world of autism@. Times Book: Times Book. (河野万里子 (訳)(1996). 『ころという名の贈り物——続・自閉症だったわたしへ』新潮社.
- [22] Williams, D. (2004). @Everyday Heaven: Journeys beyond the stereotypes of autism@. Jessica Kingsley. (河野万里子 (訳)(2015). 『毎日が天国——自閉症だったわたしへ』明石書店.
- [23] 香春 メタファーにおけるアナロジーと類似性の機能について 中部哲学会年報 51 卷, p89-106, 2020